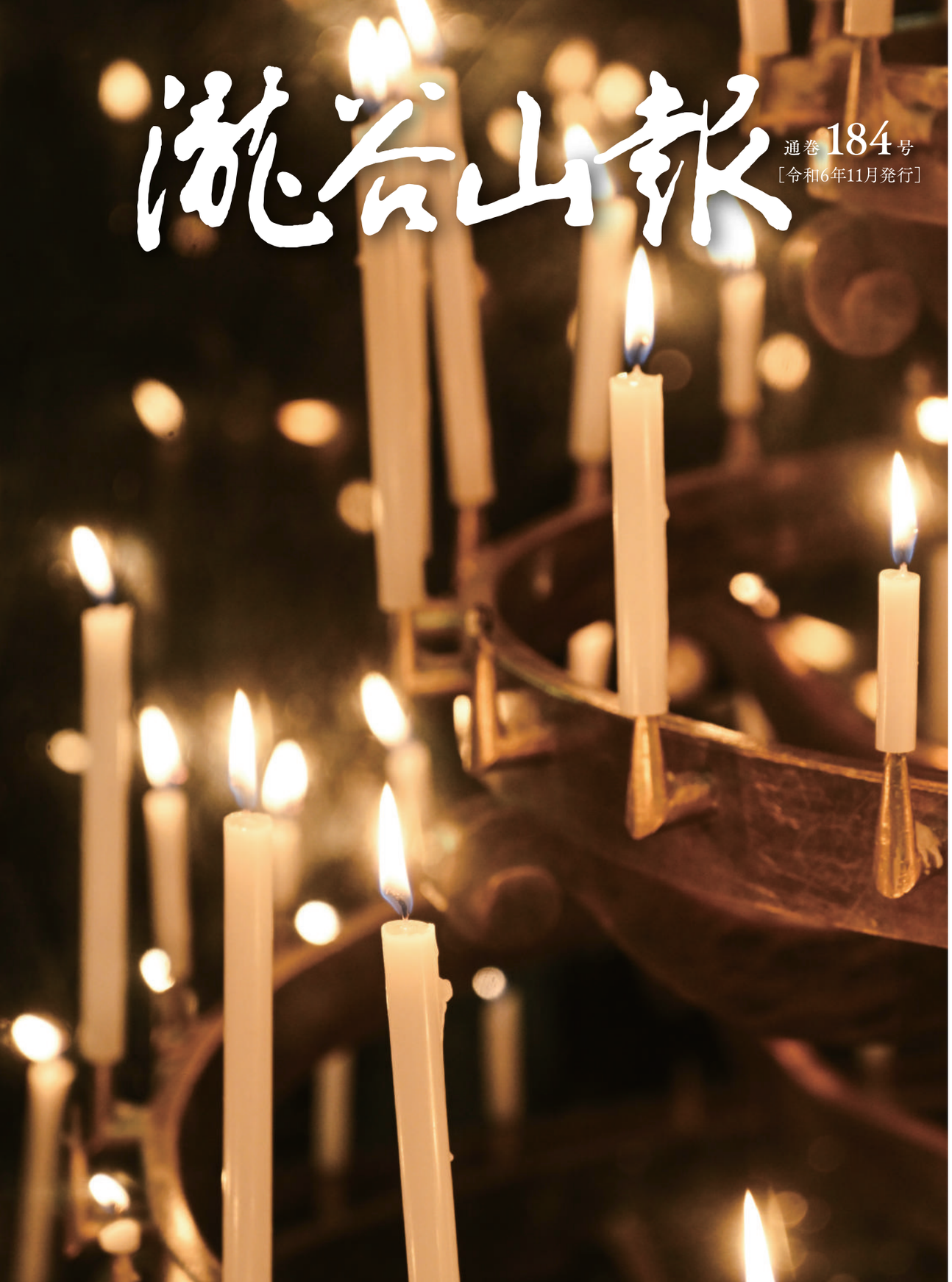


瀧谷山報

通巻184号
［令和6年11月発行］

【今後の当山行事予定】

ふれあいバザー
11月24日

〔境内特設テント〕午前10時頃～午後2時頃

納め不動
12月22日

御本尊御開扉大護摩供〔本堂〕
午前 6時　10時　11時30分
午後 1時30分　3時

瀧不動堂護摩供〔瀧不動堂〕
午前9時頃～午後3時頃

御本尊御開扉大護摩供

瀧不動堂護摩供

修正会（しゅうしょうえ）
元日～1月7日

御本尊開扉大護摩供〔本堂〕

	午前							午後				
	0時	1時30分	7時	9時30分	10時	10時30分	11時30分	1時	1時30分	2時	3時	4時
元日	●	●	●	●		●	●	●		●	●	●
2日・3日			●	●		●	●	●		●	●	●
4日・5日			●	●		●	●		●		●	
6日・7日			●		●		●		●		●	

御本尊開扉大護摩供

新春 交通安全祈願〔明王殿〕

元日	午前0時～午前1時30分　午前7時～午後5時
2日～5日	午前7時～午後4時30分
6日・7日	午前9時～午後4時　場所が法楽殿（本堂横）となります。

明王殿

瀧不動堂護摩供〔瀧不動堂〕
元日～3日　午前9時頃～午後3時頃　瀧不動堂山伏に直接お尋ねください。

日々のお護摩祈祷（元日～2月16日）

日　曜　日　午前 7時　9時30分　10時30分　11時30分　　午後 1時30分　3時
平日　土　祝　午前 7時　10時　11時30分　　午後 1時30分　3時
2月17日以降は平日午後のお護摩祈祷はありません。

交通安全祈願（車のご祈祷）

午前9時～午後4時　毎時0分・30分
毎月第4日曜日は交通安全のご祈祷はありません。

月例祭（毎月第4日曜日）

御本尊御開扉大護摩供　午前 6時　10時　11時30分　　午後 1時30分　3時
滝不動堂護摩供　午前 9時頃～午後 2時頃　瀧不動堂山伏に直接お尋ねください。
月例祭は交通安全のご祈祷はありません。

行事の予定は変更になる場合がございます。
詳しくは瀧谷山公式ホームページにて随時ご案内いたしますので、来山前に今一度ご確認ください。

［令和6年11月発行　通巻184号］
●発行所：瀧谷不動明王寺（たきだに）
〒584-0058　富田林市彼方（おなた） 1762
電話 0721-34-0028　振替 00930-5-17704
●発行人：荒谷純榮　●編集人：荒谷純榮

目線を変える

おさな児と接する機会に恵まれています。その児の様子をしげしげと見つめていると、幾つも気づかされるものです。例えば這い這いの場面。その体躯を存分に活かして縦横無尽に移動するさまは、敏捷さもさることながら、嬉々とした豊かな表情、全身からあふれる生命力そのものがまぶしいのです。

おとなが同じ姿勢をとって同じ移動速度を保つのは、特別な訓練を経ても至難の業でありましょう。そう思いつつもおさな児を真似て四つん這いになってみます。うーんやはりむつかしい。顔を前に向け続けることも、手のひらの付け方や膝の位置も安定性を欠いています。それでもその低姿勢から見える景色は少しばかり新鮮な感覚がして、さらには大昔を思い出すような気持ちも混じってくるではないですか。

思えば誰もがおさな児と同じように、こうやってああやってを繰り返してきたはずで、決して初めてのことではありません。あの低姿勢の視界から開けてくる景色に、どれだけ刺激をうけたことでしょうか。ぐんぐんと成長するにつれ、ほどなくして二足歩行を習得すると、自然と視線は低さから高さへと移行し、あの時の低視線を記憶の奥へとしまっていったのです。

1931年生まれの谷川俊太郎さん、すっかりご高齢になった詩人が近著の中でつぶやいています。その一篇の一節をご紹介。

詩「これ」

これを身につけるのは
九十年ぶりだから
違和感があるかと思ったら
かえってそこはかとない
懐かしさが蘇ったのは意外だった
この肌触りの快さは
コウゾミツマタに始まる
和紙の伝統のおかげかもしれない
〜中略〜
恥も外聞もない訳ではないが
この歳になれば
自然の成り行きと
自他共に納得しても
誰も文句は言わないだろう
二度童という言葉が私は好きです

（『その世とこの世』所収）

谷川さんのように宇宙や自分や世間をいろいろな立場や角度で眺め続けてきた人は、こども心をも持続できているように感じます。這い這いのあの心象を忘れていないのかもしれません。「二度童」という造語にその意が込められています。

一般にいうところの目線とは、人間が立脚した高さ、歩く姿勢を基準としているのでしょう。椅子に座る、正座をする時の視線はその変化形にすぎません。おとなはこの常識に照らして考える癖がついているので、ものごとの本質が見えにくくなる傾向があります。道理で上から目線があたりまえになってしまうわけです。

赤ん坊は純粋無垢のかたまりとして誕生します。それは偽りのない仏眼の功徳を備えているようなものです。そのおさな児は長ずるに従って、世俗の垢にもまみれつつ逞しく成長します。と同時に、備えている仏眼は静かに閉じかけていく。けれど、徳と齢を重ねると記憶力や体力は低下しても、反比例するように長らく休んでいた仏眼が再びゆっくりと開く可能性が増すのではないかと、これは筆者の仮説です。谷川さんのいう「そこはかとない懐かしさ」とは、そうしたこころを謳っていると思えてきます。目線という着想をより深めると、あのお不動さまの目つきの真意にもきっとたどり着けるでしょう。

秋も一段と深まりました。座禅のような端然たる姿勢もよし、時には寝転がって青空を見上げたり、這いつくばって地面に接近したりと、いろいろな目線で季節やものごとを見つめなおしてみるとよいでしょう。腰を低くすれば、謙虚な心持ちが湧いてきます。凝り固まった見方を離れてゆけば、赤子のような無垢な境地に再び帰り着けるやも。最後に赤子のように心を開いて詠んだ、※明恵上人の名歌を歳末号の末尾に添えましょう。

あかあかやあかあかあかやあかあかあかや
あかあかあかやあかあかあかや月

※明恵上人高弁（1173-1232）鎌倉前期の僧。京都、栂尾高山寺を開く。高潔な行状と高い学識で広く尊崇を集め、また幅広い文化活動の中心となって活躍した。

修正会

令和7年 元日～1月7日

御本尊開扉大護摩供　厳修

瀧谷山では、来たる令和7年元日から1月7日まで修正会（しゅしょうえ）をおつとめします。修正会では、年頭にあたり世界平和、五穀豊穣、萬民富楽を祈念し、あわせてご参詣皆様のお願い事を祈願いたします。

期間中は、ご本尊のお厨子がご開扉され、お護摩祈祷を普段より多く、盛大におつとめしております。また正月三ヶ日に限り、お護摩祈祷をお参りの方とそのお連れ様には「開運赤札守」をお渡ししております。一年の家内安全、厄除開運、社運隆昌、商売繁盛などをご祈願ささって、新たな気持ちで新年をお迎えください。

- ●お護摩祈祷時刻　12頁（裏表紙）記載
- ●ご祈祷料　5000円より
- ●赤札守の授与　元日～1月3日
  お護摩祈祷をお参りの方と
  そのお連れ様

- ●元日～1月3日までと、迎春期間（2月16日まで）の日曜日は、たいへん多くの方がお護摩祈祷を受けられ、お待ちいただく場合もございます。午前9時半の回と、午後3時以降の回は比較的余裕がありますので、分散してお参りください。
- ●お車でお参りの方は、左頁の移動見取り図をご確認ください。元日～1月3日までは、臨時駐車場（約1km東、井上軸受工業様駐車場）も利用いただけます。
- ●本堂は伝統建築のため、冬場は冷え込みます。暖かい服装でお参りください。

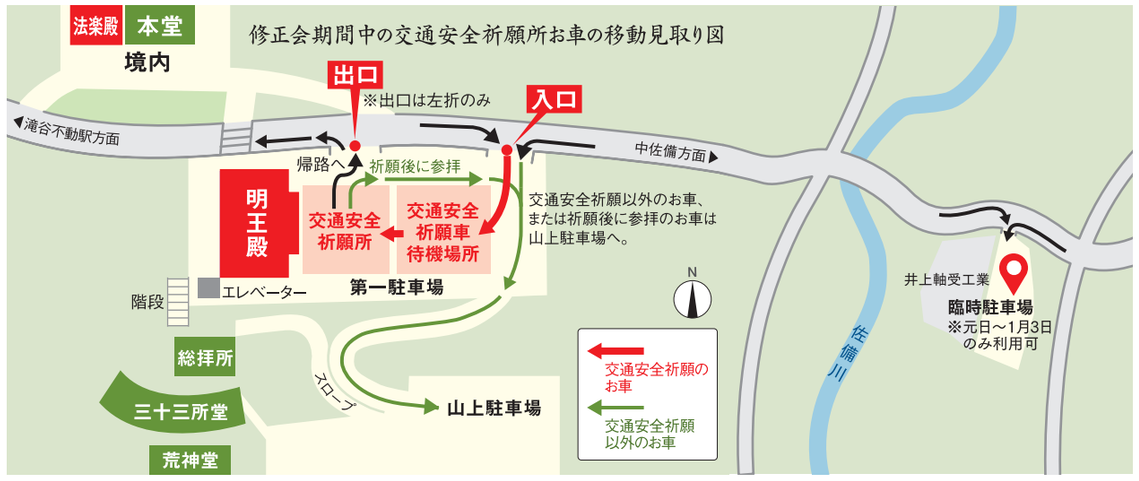
新春 交通安全祈願

修正会期間中は、当山所属の山伏出仕のもと交通安全祈願を盛大におつとめしております。期間中は、修験者により一台一台お車加持が行われます。

新年の初めに、どうぞ一年の交通安全をお祈りください。

- ●祈祷場所　元日～1月5日まで（明王殿）
  1月6日以降（法楽殿）
- ●ご祈祷時刻　12頁（裏表紙）記載
- ●ご祈祷料　1台 5000円

- ●元日～1月5日まで、明王殿前の第一駐車場は、交通安全祈願のお車専用となります。それ以外のお車は、山上駐車場または臨時駐車場（約1km東、井上軸受工業様駐車場、徒歩約15分）をご利用ください。
- ●臨時駐車場にトイレはありません。当山でお済ませください。



新春 滝不動堂護摩供

元日から1月3日まで、滝不動堂では当山所属の山伏により護摩供がつとめられます。添え護摩木をお供えの方は、修験者による宝剣加持が受けられ、護摩札をお渡ししします。

●ご祈祷時刻　12頁(裏表紙)記載

●添え護摩木　1本 300円

●護摩札と御幣のお渡し

添え護摩木を1本お供えすると黄色い護摩札を1枚お渡し、黄色い護摩札36枚で御幣1体と交換〔一願不動堂受付にて交換〕。

新年護摩のご案内と終了のお知らせ

新年護摩は修正会期間中、毎朝おつとめするお預かり祈祷です。無病息災、身体健全、開運招福など、紙札に一体一体お願い事とお名前を書いておつとめします。お札は修正会終了後お渡しいたします。

●締切　12月20日

●お申込み方法

同封の用紙にご記入の上、郵送または寺務所までお持ちください。

●祈願料　1体2000円

●お札のお渡し

郵送の方は1月10日以降、寺務所で受取の方は1月8日以降。

なお、誠に勝手ながら新年護摩のご案内は今回をもって終了とさせていただきます。ご寛恕くださいますよう、お願いいたします。今後は、お守り授与所にて紙札をお求めいただくか、特別にご祈願の方はお護摩祈祷をお受けくださいますよう、ご案内申し上げます。

聖酒「不動力」ご奉納のお願い

古く日本には、往く年の感謝と来る年の祈りを込め、新年に神仏にお酒をお供えし、お下がりのお酒を飲むことでご利益をいただくという習慣がありました。

瀧谷山でお供えする聖酒は、先先代住職の命名による「不動力(ふどうりき)」というお酒で、一本一本お名前を浄書した短冊をつけ、修正会のあいだ本堂にお供えいたします。お供えの方には、お下がりとして不動力一合瓶をお渡しいたします。

不動力は今秋よりラベルと瓶が新しくなりました。新たな不動力をどうぞよろしくお願いいたします。

●お申込み方法

新年護摩申込用紙裏面 通信欄に記入の上、郵送または寺務所までお持ちください。

●奉納料　1本3500円

●お下がり　不動力1合瓶

(郵送申込の方には、後日寺務所で受領書と引き換えにお渡ししします)

新春の縁起物・御朱印のご案内

迎春期間中(2月16日まで)、令和7年新春の縁起物を授与しております。熊手、矢守(やまもり)等の縁起物や、竈の神さまである荒神さまのお札、家中を守護してくださるお不動さまの護摩札など、縁起物を掛け替え、新しいお札に手を合わせると、新年を実感できるものです。どうぞ期間中にお受けください。

新春の縁起物は納め不動の日(12月22日)より準備しております。

●授与期間　12月22日～2月16日

●主な縁起物　熊手　矢守　えとみくじ

護摩札　三宝荒神札　等

また令和7年より、修正会期間中は「修正会特別法要」の肩印を押して御朱印を授与いたします。なお三ヶ日は、混雑緩和のため書き置きでの授与とさせていただきます。

●授与期間

元日～1月7日

新年よろこぶ茶 お接待のご案内

正月三ヶ日、「新年よろこぶ茶」と称し、お参りの皆様に、こぶ茶のお接待を行っております。心身を温める新年の縁起物として、ぜひ皆様でお楽しみください。

●日時　元日～1月3日

午前9時頃～午後5時頃「境内」

●以前行っておりました客殿でのお屠蘇の接待は、混雑緩和のため、中止とさせていただきます。

婦人会主催「ふれあいバザー」のお知らせ

瀧谷山には「奉讃会」という、ご信徒の方によって運営されるサークル(グループ)があり、行事の際にご奉仕(お手伝い)をいただいたり、講演や研修旅行などの活動を行なっています。

このたび、婦人会(奉讃会婦人部)の活動として11月24日(日)に「ふれあいバザー」(フリーマーケット)を行うこととなりました。今回のバザーは、「より開かれた婦人会を」との想いから企画されたもので、バザーの売上は災害地に寄付いたします。当日は、境内にテントを立て、有志の面々で持ち寄った品々が出品されます。また、瀧谷山からも出品いたします。紅葉も見頃の季節、お参りのついでにぜひお立ち寄りください。

●日時　11月24日(第4日曜日)

午前10時～午後2時頃

●誠に勝手ながら、値引き交渉はご遠慮ください。

除暗遍明

瀧谷不動尊へ参詣の際、朱塗りの山門を前にすると、その両脇に構える大きな石の灯篭に目が行きます。よく見ると向かって右の灯篭には「除暗」、左には「遍明」と刻まれています。

真言宗の大事なお経の一つに※『大日経』というお経があります。その解説書『大日経疏』の冒頭に、大日如来さま（毘盧遮那仏）のお徳を表す言葉として、この「除暗遍明」の語が登場します。

『大日経疏』には「毘盧遮那とは、これ日の別名、すなわち除暗遍明の義なり」とあります。意訳すれば「毘盧遮那とは太陽の別名である。つまり、暗闇を除き、遍く明るく照らすという意味である」と述べています。これはよく分かります。ところが、これは「除暗遍明」という語のごく表面的な意味に過ぎません。大日如来さまと太陽とは闇を明るく照らすという点において相似です。ですが、そのはたらきはまったく同じということではありません。『大日経疏』ではさらに詳しく説明が続きます。補足しながら少しだけ読んでみましょう。

——私たちが暮らすこの世界で、現実の太陽にはどうしても制約があります。単純に、雨や曇りの時は、晴天時に比べると光が遮られ、わずかにしか届きません。昼は天空にあるけれど夜は照らしてくれない。時間の経過によって沈み、翳る方角も出てくる。また、太陽が（建物などの）外を照らす時、その光は、内側へはいまひとつ及ばないものです。

そこで、大日如来さまの徳をあらわす「遍明」という語は、あまねく一切の処を不足なく照らすことを意味します。大日如来さまがもつ光明には、現実の太陽のような時間や方角の制限はありません。仏さまの光明とは、まさしくその智慧の象徴です。このように大日如来さまは太陽の如くであってしかも太陽以上にすべてを照らすのです。故に「日」の上に広大さ・偉大さを示す「大」という字を冠し、「大日」とするのです。また、いうまでもなく、太陽は私たちの暮らしに不可欠です。日の光がなければ生きること食べることなど、ままなりません。太陽が草木を成長させるように、仏さまの智慧の光は私たちの中にある善い心や善いおこないの小さな芽を照らし育てるのです。

もう一方の「除暗」の語からは暗闇を除くという意味が見て取れます。この暗闇とは物理的な暗さや「夜の闇」という意味だけにとどまりません。「無明」といわれる煩悩などおろかさの闇をも指しています。無明とは、仏教の根本的な教理に暗く、無理解であることをさします。「無明長夜」などといって明けぬ夜になぞらえて言及されることもあります。仏さまの智慧の光明はこの闇をも照らし、消し去ります。あるいは太陽が時たま雲に隠されるように、煩悩の雲がきれいな心を覆い隠しにやって来ます。それでも風が吹いて雲を払えば、もとの太陽の輝きがふたたび現れるように、心もまた元のように清らかなままなのです。——

異常気象、災害級とまでいわれる酷暑もようやく過ぎ去り、乾いた冬の空気が漂ってきます。冬こそ、太陽がもっとも恋しく、その尊さが身に染みる季節でしょう。仏さまの光明も、お不動さまのお慈悲も、何の制限も遮蔽もなくすぐそばにあり、我々の胸の内にも届いているはずです。

※正式名称は『大毘盧遮那成仏神変加持経』。「毘盧遮那」は、大日如来のサンスクリット名「ヴァイローチャナ」の音写。ヴァイローチャナとは「太陽」の意味。

瀧谷山の四季⑩

いよいよ朝晩も冷え込むようになり、冬の訪れを感じる季節になりました。瀧谷は昔より別名「布子谷」とも呼ばれ冷たい風の当たらない谷で、開創当初の伽藍地が兵火にかかったのち、ここに遷されて祀られるようになったのも、現在の境内のある辺りが日当たりよく穏やかな土地であったからでしょう。

滝谷山には不思議なことに十月の御縁日になるとジョウビタキが姿を見せます。常緑樹の森の地面付近にはアオジが餌を探しています。シジュウカラやヤマガラ、エナガなども次々に枝を渡ってきて、ひとしきり境内を賑わせては去っていきます。ツグミやシロハラもやってきました。毎年変わることなく繰り返される自然の営みは、それだけで貴重な豊かさであり穏やかさであることをしみじみと想います。ちいさな生き物たちの微細な変化や生活の様子を眺めていられることは、戦禍や災害がなく平和であるということの証しだからです。

世界各地で紛争や戦争が相次ぎます。広く世の中を見渡し、遠くの禍を思い世を憂うことも必要ですが、身近な平和を慈しみ大切にすること、その積み重ねが大きく世界そのものの平和へとつながるよう願うこともまた、同時に必要ではないでしょうか。

瀧谷山温故知新⑦

『涅槃像　明王寺什物』

現在、瀧谷山寺宝・什物を、ひとつひとつ画像に撮り内容を判読して整理し、アーカイブ化する事業が進められています。平素は見ることのできない貴重な寺宝を見る機会でもあり、とりわけ實善老僧の著作『滝谷山史考』に取り上げられている寺宝が出てきた時には深い感慨を覚えます。

瀧谷山報１８０号の本コラム「瀧谷山の音」で当山の半鐘のことをご紹介しました。今号では、その半鐘を造献された祐清法印の次代のご住職・舜観和尚の逸話とともに伝わる『涅槃像 明王寺什物』をご紹介します。

時代は明和二年（一七六五年。江戸中期、田沼意次が活躍した頃）のこと。当時のご住職・舜観和尚には秘蔵の弟子・舜専がおりました。舜専は「筆学を好み文学に精進し勇猛勤行」という将来有望な青年僧でしたが、なんということか、病を得て二十六歳の若さでこの世を去ってしまいます。最愛の弟子のあまりに早い逝去を嘆き悲しんだ舜観和尚は、舜専の菩提を弔うため釈迦涅槃図（仏画）を、また同時に師・祐清法印の菩提を弔って弘法大師木像を造献しました（この弘法大師木像は、現在本堂内陣ご本尊右手にお祀りされているものと云われています）。ところが舜観和尚自身も、深く悲嘆に暮れた心労のためか、舜専の後を追うように亡くなってしまうのでした。

舜観和尚のあと住職を継いだ長順和尚は、この悲しい逸話を後世に留めるために、舜観和尚が造献した涅槃図の掛け軸に詳しく箱書きし、さらに舜観・舜専両師の墓標も似た形のものを建てて、二人を懇ろに弔われたのです。この長順和尚による箱書きのある『涅槃像　明王寺什物』は、舜観・舜専両師の逸話と共に非常に印象深いもので、寺宝というに相応しい大切な瀧谷山什物のひとつです。

瀧谷山縁起にもあるように、当山は南北朝から応仁の乱までの乱世に二度も兵火にかかり開創当初のことは詳しくわからないことも多いのですが、江戸初期に復興してからの寺宝・什物は数多く、境内にある歴代僧正の墓標と併せて、實善老僧は瀧谷山の歴史を考察したのでした。『滝谷山史考』を紐解くと、当山の歴史が歴代僧正の並々ならぬ努力によって培われ編まれてきたことがわかります。

涅槃図（像）とは、お釈迦さまの入滅（肉体の死）をあらわしたもの。様々な世界から生き物が集い、嘆き悲しむ様が描かれている。

お寺のごはん

18 いが栗の天ぷら

この度の大工事で山容もすっかりと変貌し、お庭やその周辺の珍しい木々も随分と無くなってしまいました。以前には季節のめぐりとともに次々と花を咲かせ、また実をつけてその時々を楽しませてくれたものでした。その一つに盆栗（ぼんぐり）の木がありました。

梅雨の頃、ひっそりと花を咲かせ、ちょうど八月のお盆の頃、小さな実がなりました。まだ本格的な秋の到来には早いのですが、暑いさなかに実る栗の実は、涼風を待ちわびる立秋の頃そのものの心持ちです。

今回はお野菜の天ぷらで、いが栗を作ってみようと思います。

材　料

●さつま芋　●素麺　●小麦粉　●油

作り方

●さつま芋の皮をむいて、一度水にさらします。
●蒸すか湯がくかして火を通してつぶします。
●丸めて小さな丸（がん）をつくります。
●小麦粉を水で溶いてさつま芋の丸をくぐらせます。
●フライのパン粉をつける要領で丸の表面に素麺をつけます。
（素麺は乾燥したまま1センチほどの長さに切っておきます。）
●油を熱して揚げます。

出来上がり

お皿に栗の葉を敷いて出来上がったいが栗をのせます。
このいが栗の天ぷらも、秋の大祭のおりのお寺さん方のお膳によくのぼったお料理です。